

「総督官邸の伝説」試論：独立革命をめぐるレトリックについて(前)

保坂, 嘉恵美

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

81

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

1992-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004700>

「総督官邸の伝説」試論
——独立革命をめぐるレトリックについて——
(前)

保 坂 嘉恵美

序

アメリカの領土拡張主義の標語として、今日人口に膾炙している「明白なる天命」(Manifest Destiny)を初めて使ったとされるジャーナリスト John L. O'Sullivan (1813~95) は、主筆をつとめる *Democratic Review* (正式には *United States Magazine and Democratic Review*) 創刊時 (1837年) から、当時まだ新人であったセイレムの作家 Nathaniel Hawthorne に積極的な寄稿を要請している。いまだになお自国の文学が英国の亜流であることを慨嘆し、そのような宿病を断ち切って「リベラル」で「デモクラティック」なほんものアメリカ文学を創造すべしと訴える O'Sullivan の創刊の辞¹⁾は、文学的なナショナリズムの高揚と同時に、猛烈な拡張期に突入しようとしていた国家の政治的ナショナリズムのそれをも予告するものであった。O'Sullivan のイデオログとしての戦闘性とはへだたりながら、政治的には民主党派であり(実際それゆえ後には、いく度か官職への任官運動も功を奏した)、原稿料に関して提示された好条件もあって、Hawthorne はこの友人の要請に応え、その後7年のあいだに24の短篇と随筆が掲載されたのである²⁾。

とりわけ *Democratic Review* II号 (1838年5月) ~ V号 (1839年1月) にかけて連載された植民地時代の総督官邸を舞台とする四つの連作「総督官邸の伝説」("Legends of the Province-House") は、それぞれに一話完結で、時代設定も直線的な年代順の配列とはなっていないものの、みな独立革命成就の前哨戦とでもいうべき王権の失墜(あるいはその予告)のいわば四重奏であり、O'Sullivan に歓迎されるはずのテーマ性が一貫していた。これ以前 Hawthorne には、「ネイティヴ・アメリカン」な題材によるいくつかの創作を、「Seven Tales of My Native Land」あるいは "Provincial Tales" と題する短篇集にまとめて出版したいという計画があったが、結局それらは様々な雑

誌に散発的に掲載せざるをえず、こうした仮題から想起されるような作品の集合的な構想は実現しなかった。したがって、それらの作品とテーマ性を共有する「総督官邸の伝説」が *Democratic Review* に連載の場を得たことは、作家にとっても、かつての意向を幾分か回復できる好機であったと考えられる。

物語の理解のために、前もって、中心の舞台である旧総督官邸の歴史的な概略を補足しておこう。もともとこの建物は、1679年ロンドンの裕福な商人 Peter Sargeant が、ボストンの町の中心部に建てた三階建ての邸宅であった。当時のボストンにあっては、ひときわ目を引く優美な煉瓦造りの建物で、その煉瓦もオランダから輸入されたものであったという。1630年 John Winthrop をリーダーとして開拓が始まったマサチューセッツ湾植民地は、形態としては国王からの勅許状によって自治権を保証された“Charter Colony”であったが、王政復古後 Charles II世から James II世へ引き継がれる反動政策によって、1684年にはこれが取り消され、以降総督は選挙によらず国王の任命した“Royal Governor”が本国から派遣されて統治する“Royal Colony”となる。こうして迎えられる国王陛下の総督たちにふさわしい公邸となすべく、1716年建物は植民地政府によって買い取られ、第4代総督 Samuel Shute (1716～1723在職) の時から総督官邸として威光を放つことになる。1864年に火事で焼失するまでは、つまり Hawthorne の創作時には、すっかり近代都市となったボストンの喧騒著しいダウンタウンの一角にまだ残存していた³⁾。

四作は、発表順に「ハウの仮装舞踏会」(“Howe’s Masquerade” 1838年5月)、「エドワード・ランドルフの肖像画」(“Edward Randolph’s Portrait” 1838年6月)、「エリナ嬢のmantle」(“Lady Eleanore’s Mantle” 1838年12月)、「老嬢エステル・ダドリ」(“Old Esther Dudley” 1839年1月)というシリーズである⁴⁾。第一話の導入部——これまで旧総督官邸に好寄心を抱いていた「私」がある夏の午後ふと思立って立ち寄り、今や居酒屋兼宿屋となりはてしている屋敷の内部を店の主人トマス・ウェイト (Thomas Waite) に乞うて案内させた後、店のひいき客らしい老人 (第二話で、ベラ・ティファニー [Bela Tiffany] という名が明かされる) から、この邸にまつわる伝説を聞かせてもらうという発端が設定される。物語の終わった後、しめくくりは再びこの居酒屋の場面にもどって、フレーム(枠)・ストーリーを構成する。第二、第三話も、それぞれ構成はこれにならい、店で再会・再々会した「私」とティファニー氏の状況が外枠に配され、第四話は、たまたま酒場に居合わせて第三話に聞き入

っていた「王党派の老人」(an old royalist)が、今度は語り手となって物語を披露する。役割交代はあるものの、最後までフレーム構造は踏襲されている。

あえてこうした虚構の外枠（現在）が設定されることによって、内枠の物語の時間性（過去）は歴史的な奥行を獲得し、解釈のバースペクティブを呼び入れる。たとえば初めて中庭に入って観察を楽しむ機会を得た「私」が、真っ先にさりげなく読者の注意を促すインディアンの風見への言及も、既にそうした視点を負っている——「三階のてっぺんにはドーム型の小さな塔がついていてその上に、金色のインディアンがのっているのが見てとれる。彼は弓を引きしぼり矢をつがえて、あたかもオールド・サウス教会の尖塔についている風見鶏に狙いをつけているようだ」(626)⁹¹。独立革命史にその名を残すオールド・サウスは、英国の「王政」に対する「自由主義」の抵抗の砦として有名な教会で、確かにワシントン通りを挟んで官邸と対置していたが、この風見の威嚇は、シネマドマ提喻となって、両者のトポグラフィカルな対置をポリティカルな対決に早くもここで読み変えている⁹²。さらに建物の中に入ると、往時は歴代の総督たちが、華やかに着飾った国王の臣下にかこまれて、僅かの選ばれた者たちにのみ接見を許していた広間が、今やタバコの煙にすすけ酒瓶やグラスのぶつかりあう酒場と化している。昔日の特権的なアウラは払拭され、店の賑わいにみられるようなコマーシャルな活気が支配している。あるいは、かつて国王の代理人として、総督たちが「忠実な民衆」(a loyal populace [628])を睥睨したバルコニーの視界は、今や様々な商店の家並みで埋まり、その「古ぼけた顔」(its time-worn visage [628])は林立するモダンなビルにすっかり隠されている。裏窓から見えるビルの一察では、「かわいいお張り子たちが、おしゃべりしながら忙しく縫い物の手を動かし、時々私の立っているバルコニーにさりげなく目をくれる」(628)。外枠の現在に流れているのは、邸の内外に縮図化されているような「デモクラティック」で平俗化した日常性である。こうして「読者」は、あらかじめ外枠において知らされる中心舞台の過去から現在への変貌を、“Royal Past”から“Republican Present”への大きな歴史的潮流の結末として納得するのだ⁹³。

それでは、これから「伝説」として語られるこの総督官邸で起きた植民地時代の一連の「事件」は、その大きな潮流の「起源」（独立革命の成就）にどのような底脈として連なるのか。あるいは、それぞれの「伝説」が、「起源」をめぐって、どのようなインターテクスチュアリティを形成するのか。「読

者」は、「事件の真相」からは既に幾重にもへだてられている——「総督官邸の伝説」とは、事件の生き証人から一人二人を介して伝聞した語り手たち（ティファニー氏と王党派の老人）が、「私」に語ってくれた話を、さらに「私」が書いたものである。そのへだたりは、これら介在者たちの想像力によって埋められ、そして誰よりも最後に書いた「私」によって、「読者の利益と喜びに資するようにさらなる脚色がほどこされている」（629）と付言されている。その「私」が、あえて「徹底した民主黨員」（a thorough-going democrat [667-668]）と自称させられていることに留意しよう。「読者」とは「共和国」の大衆に他ならない。さらに忘れてならないのは、いわばそれら「読者」の代表として、まず誰よりも先に採否の決定を下しうるナショナルリスト O'Sullivan が控えていたことである。

はたして内枠の四つの物語は、こうした外枠で志向されているとおぼしき期待の地平に、馴致されているのか。「私」とは虚構の外枠にキャラクターの一人として配された視点の提供者であった。そして当然のことながら、そのことを了解することと、彼によって脚色され言語化されたことになっているテキスト（内枠の物語）が彼の「党派性」と透明につながっていると信ずることとは、まったく別のことである。

I

第一話「ハウの仮装舞踏会」（“Howe's Masquerade”）の梗概は、以下の通りである。

1775年4月ボストン近郊コンコードとレキシントンにおける衝突で独立戦争の火蓋は切られ、植民地側によるボストン包囲（the Siege of Boston）が開始される。小ぜりあいの頻発や、6月には勝利したとは名ばかりのバンカー・ヒルの戦い（the Battle of Bunker Hill）によってイギリス軍は大打撃を被り、やがて長期の包囲にも愛憎な終局が予感されるようになりはじめた頃のある夜、イギリス軍司令官を兼務する総督ハウ（General William Howe）は、官邸に軍の将校や王党派の貴人たちを招いて仮装舞踏会を催す。あえてこのような時に、「浮かれた祭りを演出することで、今日の苦悩と危機を、さらには包囲の絶望的な現状を隠す」（629）のがねらいであった。華やかな本国宮廷の歴史的な名士たちを仮装するものもいれば、道化師や喜劇の人物も入り交じって座はおおいに沸きかえったが、中でも、かつてのインディアン戦争の古着

か、よれよれの時代遅れの軍服で登場させられた「將軍ジョージ・ワシントンら植民地軍の上官たち」(630)が、この場で英国の総司令官(ハウ)と不釣り合いな対面をするはめになると、拍手喝采は一段と大きくなった。ところが招待客のなかにこうした虚勢の浮かれ騒ぎを、顔をしかめて冷ややかに見据える老人ジョリフ少佐(Colonel Joliffe)と孫娘が見いだされる。この老戦士の「陰気な清教徒の洗面」(630)があたかもその場全体に暗い影をなげかけ雰囲気を一変させてしまったかのように、折しも邸に対置するオールド・サウス教会の鐘の音を合図にして、どこからともなく葬送のメロディーがきこえてくると、それを先触れとして初代の総督たちの行列が広間の階段を厳かに下ってくる。黒い引き回しとんがり帽子のいでたちで厳しい顔つきをした彼らの正体を、「チャールズⅠ世の処刑判事(the rignicide judges)たちをまねた仮装行列」(633)でもみせようというのかといふかり憤っているハウにむかって、「その昔ニューイングランドの旗から屈従のしるしを引きちぎったエンディコットを先頭にウィンスロップら……かつてのマサチューセッツの統治者、本来のデモクラシーをつかさどっていたピューリタンの総督たちだ」(the Puritan Govenors—the rulers of the old original Democracy of Massachusetts[633])と教えるのは、他ならぬこの老人である⁹⁾。「怒りと軽蔑と、半分おしころされた恐怖、さらに、不安の入り交じった好寄心」(636)に心乱れながら見守る一同の目の前を、歴代総督たちの行列が、亡霊のように階段から次々におり下ってきては玄関の外へと消えてゆく。やがてハウの前任者ゲージ將軍(General Thomas Gage)があらわれ、そして最後に、一同よく見覚えのある軍服のマトンにすっかり全身を隠した仮装の姿が登場する。軍力を抜いて正体を見せろと威嚇するハウの眼前で、彼だけに見えるようにちらりとマントを開けると、ハウは驚嘆してひるみ刀は床に落ちる。仮装の「ハウ」が、邸から消え出してゆくとき、その敷居のところで床を踏みつけ握りこぶしを振り挙げてみせたように、「サー・ウィリアム・ハウも、この官邸を最後にしなければならぬ時におよんで、まったく同じ身振りを反復したという。それは、国王から遣わされた最後の植民地総督(the last royal governor)としての、彼の憤怒と悲哀の表現であった」(638)。「もし私が反乱軍の人間なら、これら昔の総督たちの亡霊は、ニューイングランドにおける国王の主権を送る葬列(the funeral procession of Royal authority in New England)に呼び出されたのだと想像してしまうかもしれません」(634)という行列の途中で洩

らされたミス・ジョリフの言葉が、成就されるべき予言でもあったかのよう
に、ほどなくワシントン軍の進攻を警告する砲声が、深夜のオールド・サウス
の鐘の音に入り交じって一同の耳に聞こえてくる⁹⁾。

.....

この物語における歴史解釈は、明らかに、レトリックとしての政治的なタイ
ポロジー（予型論）に支えられている。独立革命の成就（本型）とは、植民地
時代の初代清教徒の父祖たちの「デモクラシー」への正統な回帰であり、それ
は、常に既に約束されたこととして前史のなかにその前哨戦（予型）をみいだ
すことができるという修辭的な再解釈。あるいは Hawthorne の作品系譜でみ
れば、Frederick Newberry の指摘するように「エンディコットと赤い十字」
（“Endicott and the Red Cross” [1634年の事件・1837年発表]）や「白髪
の戦士」（“The Gray Champion” [1689年の事件・1837年発表]）といった、
植民地時代本国の暴政に対決した清教徒の反骨精神をテーマとする前作品（予
型）の、タイポロジカルな完成（fulfilment）でもあるだろう¹⁰⁾。ジョリフが
招く歴代総督たちの行列が、マッサチュセッツ湾植民地の正統な初代総督ウィ
ンスロップではなくエンディコットによって先導されているのも、ゆえなしと
しない。「今の窮状と危機を、さらには包囲の絶望的な現状を隠そうとした」
ハウのマスク（仮装＝隠蔽工作）は、現実には迫りくる敵（ワシントン一派）を
モック・ヒロイックに仕立て貶めることで虚勢を回復しえたものの、結局のと
ころジョリフの召喚した反マスク（＝真の敵としての初代父祖たち）によって
その焦燥を露呈し、ついには、ほんもののハウが反マスク＝仮装の「ハウ」を
反復するという究極的な転倒で幕となる¹¹⁾。伝説は、こうしてほんもののハウ
に入れ替わった仮装の「ハウ」をこそオリジナル化し、過去から未来へと永続
的に再起する歴史の象徴として語りつぐのである——「この官邸にまつわるい
くつかの伝説の中でも、とりわけ次のような不思議な話が信心深く繰り返し語
りつがれている。イギリス軍撤退の記念日の夜になると、マッサチュセッツの歴
代の総督たちが、いまでも官邸の表玄関からすべりでてゆき、やがて最後
には、軍服のマントを経帷子のようにまとった姿が現れ、握りこぶしを振り挙げ
て、鉄鋌を打った軍靴でその広いフリーストーンのステップを踏みつける。そ
のしぐさは、一見絶望感が絶頂に達しているかに見えるのだが、踏みならす足
音はまったく聞こえてこない」（638-639）。

しかし、歴史の必然として追放されねばならないハウは、「エンディコット

と赤い十字」や「白髪 of 戦士」の圧政者たちとはちがって、糾弾されるべき具体的な罪科によって造形されてはいない。むしろ彼の罪は、積極的に「悪」を働いたことではなく、「正統なる善」を認識できなかったことに暗示されているというべきであろう。「なにかの陰謀がしくまれているのかもしれませんが」（633）と心配する側近に、「せいぜいたわけた冗談というほどの謀反にすぎまい。それも最も退屈なたぐいのな」（633）と笑い飛ばす態度を、彼は最後の時まで崩さない。したがって彼の無頓着な発言は、いたるところドラマティック・アイロニーの格好の仕掛けどころとなって、彼の読みの浅さを増幅してみせることになる。たとえば、エンディコットに先導された黒装束の初代父祖たちに対して、「チャールズⅠ世の処刑判事たちをまねた仮装行列か」ともらすつぶやきの、本人にはそれと認識されぬ「真実」——清教徒の反抗のドラマは、象徴としての「国王殺し」の儀式化にはかならない。いずれにせよハウの造形は、悪名高い圧政者ではなく、何故かは言説化されず王党派のスケープ・ゴードとして屈辱的に引き回されるモリヌー少佐（「ぼくの縁者モリヌー少佐」“My Kinsman, Major Molineux”——1832年発表）のそれに、むしろ近いものであるだろう。「ハウの仮装舞踏会」を「総督官邸の伝説」の最初のテキストとしてどのように問題化するかを考えると、こうしたハウとモリヌーの近親性を視野に入れば、次に引用するような Colacurcio の洞察の先見性が浮かびあがってくるであろう——「……ホーソンは、『ぼくの縁者モリヌー少佐』で暗示されている意味においてのみ、王党派の総督たちを『惨め』だと信じたのか（つまり、彼らの臣下の嫉妬と反抗心によって『惨め』にされたのだと信じたのか）、あるいは、彼らもやはり卑劣漢で腐敗した植民地の官僚体制のおりかすだけだと感じていたのかどうか、問い直してみる余地があるだろう¹²¹⁾」。

第一話に関するかぎり、「伝説」のテキストは、独立革命の成就を清教徒の父祖たちが標榜した「デモクラシー」のいわば嫡孫として、いちずに合法化（legitimatize）しているようにおもわれる。しかし、Hawthorne の認識はジョリフのそれと同一なのか。その問いは、後続のテキストが第一話の「伝説」といかなるインターテクスチュアリティを形成するかという問題に引き継がれうるだろう。後続の「伝説」は、第一話によって合法化されたとおもわれる独立革命の成就（＝起源）を、単なるアナロジカルな反復によってさらに強化していくのみなのかどうか。

II

第二話「エドワード・ランドルフの肖像画」の梗概は、以下の通りである。

1770年9月のある日、政策の挫折から前年本国に帰ってしまった総督フランシス・バーナード (Sir Francis Bernard) の代行として執務にあたっていた副総督トーマス・ハッチンソン (Lieutenant-Governor Thomas Hutchinson) は、重大な政治的決断を迫られていた。数年にわたって煽っている民衆の反抗を鎮圧するため、ハリファクス (Halifax—カナダ東岸の港) からイギリス軍三連隊を動員して、ウィリアム砦 (Castle William—ボストン湾にあった島の要塞) を植民地軍に代わって占拠し、さらにはボストンの町へ進駐させよという本国からの命令である。そんな深刻な懸案があるにもかかわらず、先刻から彼の注意は、官邸の自室に掛かる一枚のキャンバスに引き付けられていた。昔から掛かっていたこの絵がいったい何を描いたものであるのか、長い時の経過で黒くくすんで今では判然としない。たまたまその時同席していた彼の縁者でウィリアム砦の植民地軍の隊長リンカーン (Captain Lincoln) と姪のアリス (Alice) は、彼の注意に刺激されて、その絵のモデルが何なのかとひとしきりやりとりを交わす。リンカーンは、昔から伝わる荒唐無稽な噂話——たとえば、セイレムの魔女狩りの時に捕えられた魔王の肖像であるとか、民衆に災いの及ぶ時になると正体を現す悪魔が住みついているといった——をアリスに聞かせ、彼女は大いに好奇心をかきたてられる。生まれはニューイングランドながら、かつてイタリアで父親と暮らしかの地で美術に造詣を深めた彼女によれば、オリジナルを復元する技術が知られているという。しばらく黙想していたハッチンソンは、二人の噂話がいかに歴史的な信憑性のないものであるかを教えるかのように、自分がかって好事家としての興味から調べた結果、これが官邸の創設者エドワード・ランドルフ (Edward Randolph) の肖像画であることを知らせる。驚いたリンカーンは、「われわれの父祖たちが、おおよそデモクラティックな特権を享受してきたのは、最初の植民地勅許状のおかげであったが、この人物こそそれを取り消してしまった張本人、ニューイングランドの宿敵¹³⁾」(644)であり、蹂躪された民衆の呪いが、彼のその後の人生の死にいたるまで及んで、その形相もそれ恐ろしいものに変貌したという言い伝えを思い出す。一方アリスも、叔父の教育的な言葉に、「ニューイングランド・ガール」としての血がさわただのか、こうした土着の噂話にも悔りがたい「モラ

ル」があって、「為政者がみずから無責任だと感ずるとき、人々の呪いの重みを彼らはこの恐ろしい形相によって思い出さねばならないという教え」(645)ではないか、それだからこそ、そんな不吉な絵であっても長い間この官邸に掛かっているのではないかと反発する。これに気色ばんで、ハッチンソンは二人に進駐の決断を宣言する。部屋を退出する時、アリスはカンヴァスにむかって手招きし、「さあ出ておいで、邪悪な霊よ。おまえの出番だわ」(646)と呼びかける。

同夜、決定が申し渡されるべく、「清教徒の父祖たちのきまじめな精神」(646)を継承するポストンの行政委員たち、対照的に「宮廷人の礼装のごとき煌びやかさ」(646)に身仕度をととのえた総督の諮問委員たち、リンカーン、彼に代わって砦の指揮官となるイギリス軍の将校が、官邸に召集される。アリスも部屋の一隅に控えていた。行政委員の代表が、歴史家でもあるハッチンソンの名誉に訴えて、流血の事態を招いて永久に汚名を残すよりは、いつか彼自身の行為が「本当の愛国者であり公正な統治者として」(646)歴史にされるようにと、決断の翻意を促す。しかし、数年前私邸を暴徒に襲撃されていたハッチンソンは、この事件に言及しつつ、植民地側の不当な民衆扇動に対する不信をあらわにして、そうしたあなたがたが「躍っているらしい一時的な悪い心の病」(647)に断固とした処置をとること、国王の旗もとに避難させることこそ、将来祝福されようと反論する。代表はさらに、彼らも父祖たちにならって、圧政者となるものには力を尽くして抵抗するとなお威嚇するが、「国王こそわが主人、イングランドこそわが母国！その武力に支援をうけて、衆愚をねじ伏せ蹴散らすのだ」(648)と言い放って、命令書に署名しようとペンをとる。その時、リンカーンが彼の注意を別のものに促した。例のカンヴァスには、これまで黒いぼろくずがのっていただけなのに、今やそれが立派なシルクのカーテンに代わって、絵をおおい隠している。アリスが進み出てそれを引き剝がすと、一同の驚嘆したことに、これまで黒くすすけていた肖像が表情あらわに復元されていた——「その表情は、もし言葉で伝えうるとすれば、何かおそろしい罪が露見し、取り巻いている大衆の苦々しい憎悪と笑いと不面目な嘲りに曝されている卑劣漢のそれであった。……魂の苦痛が形相にあらわれ、あたかも長い歳月のくもりに隠されているうちに、その表情に暗い深みが次第に募っていき、今その苦々しい顔が再び現れて、その場に災いの前兆をなげかけているかのようであった」(649)。肖像の恐ろしい表情にひるむハッチンソン

に、「民衆の権利を蹂躪した彼の報いをごらん下さい。——ならば、彼の罪を回避して下さい」とアリスは訴えるが、彼は氣力をふりしぼり肖像をにらみつけながら、「それが絶望の行為であることをものがたるかのような字体で、(進駐の命令書に)トマス・ハッチンソンの名を署名した」(650)。長い歳月が経過して、イギリスで臨終をむかえたハッチンソンは、その末期、「ボストン虐殺」(the Boston Massacre)の血にむせるとぶつぶつあえぎながら、彼の狂おしい表情には、まぎれもなくエドワード・ランドルフのそれが甦っていたという。

.....

時代的には、第一話の五年前。ハッチンソンは、ゲージの前任者でハウから廻ること二代前、文民としては最後の植民地総督であった。彼は、1630年代に反体制的なアンチノミアニズム (Antinomianism) を奉じて有罪判決を受けロードアイランドに追放されたアン・ハッチンソン (Anne Hutchinson [1591-1643]) の後裔で、ボストン生まれではあったが、副総督就任後 (1758[1771~1774総督在職]) 特に1760年代後半の一連の課税政策の責任者として、植民地の民衆の不興を一身に買っていた。実際物語の中でも言及されている通り、1765年8月の夕、ボストンのノースエンドにあった私邸が暴徒の襲撃にあって破壊されたという事件は、悪名高い印紙条例 (the Stamp Act) の施行にからんでのいやがらせであった。さらに臨終の床で、彼自身のあえぎ口からもれたという「ボストン虐殺」も、この物語の現在から半年前の1770年3月、イギリス軍兵士と市民の些細ないさかいから始まり、暴徒と化した民衆に対して兵士が銃を乱射するにおよんで、市民の側に5名の死者と多数の負傷者が出た事件で、そうした事態を容認したとしてハッチンソンへの民衆の敵愾心は募るばかりであった¹⁾。第一話が既に独立戦争の緒戦期に設定されていたのに対して、第二話はいわばこうした独立戦争前夜というべき騒乱の時期を背景としている。

前作同様この物語においても、ランドルフとハッチンソンが、というより植民地に対する時代を隔てた二人の「裏切り行為」が、清教徒によって常に既に報復され呪われる運命にある圧政として、タイポロジカルに呼応させられている。アリスとリンカーン、とりわけアリスが、ジョリフの役割を継承して、清教徒精神を振起するイデオログであり「驚異」の仕掛け人となっているが、マスクが隠れと顕われの逆説的な装置であったように、ここでは肖像画が同様の潜在力を負わされている。アリスの「驚異」の仕掛け、すなわちランドルフ

の肖像画の復元技術は、ジョリフの活人画的な演出とは違って、ダイナミックに「事件を創造し、それ自身の予言を成就する」⁹⁾のだ。すなわち「事件」とは、ハッチンソンが英軍の進駐を許可するという行為そのものではなく、それがランドルフの裏切りの反復であると予言されてしまうことである。そしてその予言は、アリスが物語前半で叔父の部屋を退出するとき悪霊を呼び招くことに暗示されているように、究極的には、彼女の信奉する清教徒的な「常に正義である」(“always righteous”) イデオロギーの逆説的な悪魔性につながっている。

多くの批評家が指摘するように、この物語にある対立の構図は、単に王党派対民衆の政治的なそれではなく、ヒストリーとアートの、あるいは、「合理的な歴史主義と想像的な道徳的真相」¹⁰⁾の対立というべきものであるだろう。復元されたランドルフの肖像に一瞬ひるみながら、ハッチンソンは次のようにアリスを叱責する。

「なんという娘だ」と、彼は苦々しく笑いながらアリスの方に向き直り、こう言った。「おまえは、おまえの画家としての技術を——秘かなたくらみを好むおまえのイタリア精神を——おまえの演出効果をねらったトリックを、こちらに持ち帰ってきて、そんな浅はかな計略で市会や国事に影響を及ぼせるとでも考えているのか」(650)

確かにハッチンソンはこの場面で、彼の言葉が訴えるほどには肖像画の脅迫的な暗示に超然としているわけではない。むしろ「(命令書に)署名したことで、あたかも彼の救済が帳消しになってしまったかのように」(650)彼は震え、自分の運命が呪いのうちに封印されるのを感じとっているかのようである。にもかかわらず、彼をこのように合理的言説に固執させているのは、彼の啓蒙時代の統治者としての理性であったろう。物語の中でも言及されている通り、彼は浩瀚な『マサチューセッツ湾植民地史三巻』(*The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay* [3 vols, 1764-1828])¹¹⁾を書き残した歴史家でもあったが、その文体には、合理性・慎重さ・抑制といった彼の資質がそのままあらわれているという評価ももつばらである。Bernard Bailyn は、伝記『トマス・ハッチンソンの試練』の中で、宗教に関してとて例外ではなかった彼のクールな合理性を、次のように解説している。

彼は、清教徒のファナティズムを軽蔑していた。人々を熱狂的な独善にかかりたてお互いを責め苦しめあう、そういう事態に至らしめるあまりに精細な教義の織り込まれた父祖たちの信仰の有り様においても、あるいはもっと近代的な信仰形態、すなわちその偏屈な信奉者たちが、必ず訴訟に訴えないでは事の決着をつけないといった敬虔家ぶった信仰ぶりにおいても。彼の曾々祖母にあたるアンの生涯に、彼は惹かれもしぞっとしてもいた。彼女の誠実な宗教的情熱は、彼女の敵の破壊的な狂信と同様、それ自体としては、人道にかなったものではなかったと彼は感じていた。『マサチューセッツ湾植民地史』の一節で、彼は有名なアンチノミアン論争の一部始終を詳述しているが、それはまさに、頑迷偏狭な信仰に対する啓蒙主義者の告発の要諦といえるものである……¹⁸⁾。

おそらく彼は、清教徒のメンタリティーを熟知していた。にもかかわらず、そのあまりに保守的な合理性・合法性への固執が、彼のうちで歴史的な想像力を抑圧し、彼らのイデオロギーの恐るべきレトリックを、彼にとってとうてい語れない偏執として拒絶させたのではないか——すなわち、常に正義である清教徒の敵となるものは、すべて悪魔であり、神に契約した者としてそれを制圧せねばならないというレトリックを。

ハウの仮装舞踏会と同様に、この物語の夜の場面にも儀式的な対立が布置されているが、そこで展開される議論は、現実の政治的なコンテクストを解体して不可避にそうしたピューリタン・レトリックを突出させている。

「そうです」と、副総督の命令を背立たしげに待ちながら、イギリス軍の中尉が言った。「この植民地の扇動家たちは、悪魔をけしかけ、今となってはもうおとなしくさせることもできないのです。神と国王の名において、われわれこそが悪魔を払う者となりましょう」

「悪魔に干渉するなら、その爪に気をつけるがいい！」とウィリアム紫の隊長が、彼の同胞に対する嘲罵に憤って答えた。

「お若い方」と長老の行政委員がいった。「どうか、言葉に邪気を入りこませぬようになさるがいい。われわれは、圧政者に対しては祈りと断食をもって抵抗するのですぞ。われわれの祖先がそうしたようにな。さらに、彼らのように、賢明なる神の意志がわれわれに差し向けた運命には、それ

がいかなるものであれ、従いもするのですぞ——常に、われわれ自身の最善を尽くしてそれを矯正しようとした後にな」

「そら、悪魔の爪がのぞいている」とハッチンソンはつぶやいた。彼は、清教徒の服従の本質をよく理解していたのだ。(647-648) (傍点筆者)

Colacurcio が指摘するように、長老の行政委員のこの数行の諫言のなかに、ピューリタニズム研究に一時代を画した硯学 Perry Miller が何百頁も費やして解明しようとした「ニューイングランド精神」の本質が凝縮されている¹⁰⁾。外的な災禍（自然現象であれ人為的政治的なものであれ）に神の怒りを見だし、それが彼ら自身の罪によってひきおこされたものとして自浄のための祈りと断食を行なう。しかる後に、その悔い改めの大義を「最善の力を尽くして」歴史において実現すること——こうして彼らの「抵抗」＝「矯正」＝「転覆」は、神によって選ばれた者たちの浄化の儀式としてイデオロジカルに正当化され、神聖な戦闘性が鼓舞される。「そら、悪魔の爪がのぞいている」とつぶやくハッチンソンは、なるほど「清教徒の服従の本質」をよく理解していたのである。

「エドワード・ランドルフの肖像画」は、テキスト全体の志向においては前作「ハウの仮装舞踏会」から「清教徒精神」の反復的な顕現というタイポロジカルなレトリックを継承しつつも、あえてちらりとのぞかせた「悪魔の爪」によって、前作においてはあたかも自明であった彼らの「デモクラティックな正義」がいかにデモニックな戦闘性をはらみうるかを一瞬のうちに抉剔する。その「爪あと」は、いわばいかなるトラウマとして後続の物語に投影されていくのか、あるいは忘却されてしまうのか。「独立革命の成就」をめぐる言説が、何を記憶し忘却したのか——残り二作を読み進め、次号で考察する。

注

- 1) *Democratic Review* の preliminary issue [1837年10月] より。Neal Frank Doubleday, *Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (Durham: Duke U. P., 1972), p. 119の引用参照。
- 2) Hawthorne は、1873年春 Bowdoin College 時代の級友で当時民主党の国会議員となっていた Jonathan Cilley を介して、O'Sullivan と知り合ったと推測される。二人の関係は、セイレムの名家の令嬢 Mary Crownishield Silsbee をめぐってライバルとなり決闘にまで発展しかけた時期もあったが、その後 O'Sullivan

は、民主党の人脈を通じて Hawthorne の公職への任官運動に尽力するなど、交友関係は長く続いた。二人の関係については、以下の伝記に詳しい。Arlyn Turner, *Nathaniel Hawthorne: A Biography* (New York, Oxford U. P., 1980). James R. Mellow, *Nathaniel Hawthorne in His Times* (Boston: Houghton Mifflin, 1980).

- 3) 現在は、ボストンの繁華街となっているワシントン通りを一ブロック入った路地（プロビンス通り）の一角に、煉瓦壁と鉄のアーチが残っているのみで、歴史解説の案内板はあるものの、その存在は一般にはほとんど知られていない。
- 4) この四作は、後に短編集 *Twice-told Tales* (1842) に収録された。
- 5) テキストは、*Nathaniel Hawthorne: Tales and Sketches* (The Library of America, 1982) を使用し、() 内の数字は頁を表す。以下引用部分は、すべてこの版による。
- 6) 植民地時代の傑出した彫り物師 Shem Drowne の作といわれるこのインディアン射手の風見 (the Indian Archer Weathervane) は、現在ボストンのマサチューセッツ歴史協会 (the Massachusetts Historical Society) に収蔵されており、一般に公開されていないが見学は可能である。なお Hawthorne には、Drowne をモデルとした短編「ドラウンの木彫りの像」("Drowne's Wooden Image" [1844]) がある。
- 7) 「総督官邸の伝説」全体のフレーム (外枠) に焦点をあて、その構造的な意義を分析した好論は、R. L. Reed, "Telling Frame of Hawthorne's 'Legends of the Province-House,'" *Studies in American Fiction*, 4(1976), pp. 105-111.
- 8) John P. McWilliams, Jr. によれば、ジョリフは完全に架空の人物というわけではなく、1689年総督 Andros の勅許状破棄に絡む圧制に挑戦したボストンの行政委員 John Joyliffe がモデルで、Hawthorne の創作の取材源であった Thomas Hutchinson の *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay* (3 vols, 1764-1828) のうち、I 巻及び II 巻に言及がある。John P. McWilliams, Jr., "Thorough-going Democrat' and 'Modern Tory,'" *Studies in Romanticism*, 15(1976), pp. 562-563参照。
- 9) この架空の舞踏会は、実際1778年5月18日イギリス軍将校たちがハウの帰国を記念して、フィラデルフィアで開催した大掛かりな送別パーティーをヒントに描かれているという指摘がある。Fumio Ano, "The Mischianza Ball and Hawthorne's 'Howe's Masquerade,'" *Nathaniel Hawthorne Journal*, 4(1974), pp. 231-234 参照。
- 10) Frederick Newberry, *Hawthorne's Divided Loyalties: England and America in His Works* (Rutherford: Fairleigh Dickinson U. P., 1987), p. 71.

- 11) 「反マスク」(the anti-mask)については、Michael J. Colacurcio, *The Province of Piety: Nathaniel Hawthorne's Early Tales* (Cambridge: Harvard U. P., 1984), p. 402参照。
- 12) Colacurcio, *op. cit.*, p. 405.
- 13) Edward Randolph (1632-1703) は、James II 世より派遣された反動的な総督 Sir Edmund Andros (1686-1689在職) の下で、勅許状の破棄に力を尽くした官僚。「白髪 of 戦士」("The Gray Champion") にも登場する。
- 14) ハッチンソンについては、Bernard Bailyn, *The Ordeal of Thomas Hutchinson* (Cambridge: Harvard U. P., 1970) が、傑出した伝記。また、井坂義雄「トマス・ハッチンソンについて」『法政評論10号』(1985) も有益な紹介エッセイである。ボストン虐殺については、Hiller B. Zobel, *The Boston Massacre* (Norton: New York, 1970) を参照。なお Hawthorne 自身も、『おじいさんの椅子』(*The Whole History of Grandfather's Chair* [1841]) で両者を扱っている。テキストとしては、*True Stories from History and Biography* (Columbus: Ohio State U. P., 1974), pp. 153-172参照。
- 15) Evan Carton, "Hawthorne and the Province of Romance," *ELH* 47 (1980), p. 338.
- 16) Newberry, *op. cit.*, p. 79.
- 17) 現在の決定版としては、Lawrence Shaw Mayo ed. *The History of the Colony and Province of Massachusetts-Bay by Thomas Hutchinson I~III* (Cambridge: Harvard U. P., 1936) がある。出版事情については、1巻の "Editor's Introduction" pp. v-viii を参照。
- 18) Bailyn, *op. cit.*, pp. 21-22.
- 19) Colacurcio, *op. cit.*, p. 416.